

小諸を去る辞（「学友」に掲載されたものから）

浅間山下 寒水生

昨三十三年春 吾諏訪湖辺の人にわかれて、落魄一度浅間山麓に來りし以來 春風秋雨、回顧すれば、既に一星霜の夢を結びにけり。而かも運命の魔神は、刻々吾を駆り 吾をして長へに此愛着の郷に止るを得ざらしむ。人生のこと、過ぐれば、やがてうたかたの、其果敢なさは、いづれか一夜の夢にあらざらん。さはれ 過去一年間の小諸に於ける、吾身の歴史は、げに忘れんとして忘るべからざるものなりけり。而かも吾今まさに小諸を去らざるべからず。

あゝ吾れ遂に小諸を去らざるべからざるか。

なつかしき哉 小諸の土地よ。御身の四周をめぐれる山と水と、御身の身边をかざれる森と花と。御身の上を流るゝ清涼の空気と、而して御身が生みたるあどけなき少年少女と。御身の中に峙ち見ゆる小諸小学校の建物と、而して又特に吾受持百三十人を教へたる薄暗

き土蔵と、是等のものは 過去一年の間 吾朝夕の友として吾心身を養ひつゝ、堪へ難き吾萬斛の情懷に暫しの安慰を与へたる伴侶なりき。

思ひぞ出づる去歳の四月、世は新春の風いとやわらかに吹き渡りて、人々樂しき野辺に袂を聯ぬる頃しも、吾は諏訪湖辺に於ける多くの知友に別れ、吾が教へ子と別れ、吾老親を後にし、丈夫の眼底さすがにとめあへぬ萬斛の涕涙を、強ひて吾が胸憶になでおろしつゝ、春まだ寒き和田嶺の頂に、残んの雪を践みにき。

げに忘れ難きは其の出発の前後なり。  
一夜同人と別を湖畔の旗亭に惜しむ。

月朧 君に別るゝ恨哉

三村

酌めや君 東綿嶺を出づれば故人無し

全

あゝ葺爾たる小天地、奇才を容るゝ地にあらず  
行けや行け、浅間の頂 月冴えて、

千曲の流 水清し、丈夫凌々の侠骨をさらすに、  
不足あるべしや

全

白蝶の 一つあぶなし 花いばら

吹雪

西曆二千年春巴屋楼上に君を送る

国粹

君行くや 南山のいづれぞと 人は問ふ

凡水

行けよ君 渾円球上 月照らず

生々

山川を 遠く隔つる別れ路を 隔てぬ君に 惜しむけふ哉

全

行けや君 浅間の原に 汽車走る

国粹

行けや君 千曲の流れ 水清し

全

行けや君 関八山川に 霞立つ

全

行けや君 望月の 駒嘶くことしきりなり

全

行けや君 川上のそば 三千丈

全

行けや君 御牧原に馬 肥えたり

玲瓏

いざや行け 其の勢いで 五大州

同

子弟に代わりて

国粹

師の君の 去りにしあとは 如何にして故郷の花の春を眺めん

去歳のけふ わらじのひもと うたひてし 師の君のけふ越ゆる悲しさ

酒に酔うて 君に別るゝ月朧 右衛門

別れ路の 吾に句も無き涙哉 寒水

諏訪のうみの よし其水はかはくとも 胸の涙ぞ ひるよしも無き

いざさらば 家郷の山よ さきくあれ

全 全

多謝す 吾が知己よ。滔々の社会は遂に此の狂漢を容れずと雖も、吾が友 吾が生徒未だ全く此の薄幸の身を棄てざるなり。

四月五日 船を浮べて湖上に吾を送りしもの、吾が友玲瓏及生徒数名 春色満天春波揚々 眸を放てば 高島城の残塁屹然として聳えたる彼方 かすみ込めたる半空に浮かび出づる富峰の姿なんぞ其うるはしくしてけ高きや。行くもの送るもの 主客只 恍として一幅の画中に遊びつゝ 浩歌低吟 舷を打ちて相答ふる時 扁舟水を切て只其の行くことの速なるを恨みけり。やがて和田峠の麓に別れし時 残るもの只袂を以てその面を蔽ひき。行くもの杖を挙げて吟じき。

十里家山不容吾 又抱狂骨上征途

かくして吾は其の後一年間を浅間山下に暮すべく 小諸停車場に下りき。

諸君は熟知す、師範卒業後五年間に他郡へ転任するものは、是非共公売の処分を受けねばならぬことを。あゝ公売処分、この一語 諸君は聞いて直に其の何の意味たるを解するならん。

吾れ 職を育英の任に受て 魯鈍 人を教ゆるの方を知らず。又世に處するの道を解せず。身を処する、疎狂。人に容れられず、また人を容れず。幾度か

失敗と暗黒と悔恨の歴史を閲して、猶且、信濃教育界に最後の討死を遂ぐることをなさず。公売の処分者となりて、更に綿嶺を越ゆるの陋を演ずるに至りては、吾れ自ら恥を知らざるの甚だしきを笑ひたること、只一再のみならず。

諸君よ。僕の如きものは 實際過去において、信濃の教育界に討死を遂ぐべきものたりしなり。所々の戦場に手負を受けて、更に亦転戦を企つることの、如何に陋なるかは、吾も亦之を知りながら 而かも、吾をして遂に浅間山下に來たらしめたるは 実に吾が知己の一言なりき。

余は学友読者中の吾が知己諸君に向かつて白状す。

諸君よ

天事、人事、多くは吾に非にして轆轤落魄 事 志と違うを見て、去年春吾友矢島兄等の忠言に感泣したる結果 僕は 實際吾胸中に 或る一種の企図と決心とを起したりき。思ふにかの時、僕にして若し、その企図に従ひて、生涯の進路を撰ばしめば、事成らずして終るも亦玉碎の感ありしなり。否 少なくも 信濃教育界の小諸学校における吾が恥心だけを少うするを得たりけんものを。丈夫由来耻瓦全 長らへば恥多かるべき人の世よ。

さはれ 人生は意気に感ず。去年春 吾れ諏訪に在りて、伴野文太郎兄よりの書を得たり。

曰く 来たりて 小諸学校に吾が事業を助けよと。吾れ 魯鈍にして世の勢利を追ふて趨るの道を知らずと雖も 又多少一片の意氣 知己に許すの義を知らざるに非ず。吾れ 過去に於て伴野兄を知りたること只一回のみなりしと雖も、肝胆の相照は爾来まことに一見旧知の感ありしなり。吾れ 稻荷山に於てせし君の経綸を知る。また略 小諸学校在来の歴史を知る。又況んや小諸学校に吾知己依田天籟兄の在るを知るに於てをや。幾多他郷よりの招きは、皆之を拒絶したるに拘はらず、吾は一諾 単鞋 飄然として、小諸の校門に入りしこと 他の人より見れば 如何に軽率にして又耻知らぬ業なりけん。

過ぐれば早き年月よ。げに光陰は千曲の流よりも速にして吾れこの地に來たりてより、既に一年の日子を閲して今や小諸生活の局を結ばんとするに臨み、首をめぐらして過ぎこし方を見かへれば感懐まことに少なからざるものあり。吾れ此地に來たりし時、小諸学校の事 荒廢 真におどろくべきものあり。改むべきもの 進むべきもの 怪刀以て断つべきの乱麻、誠に少なしとなさざりき。天若し、吾伴野兄の快腕を借りて、此難局の革新に資するならんには、吾不似と雖も、亦一臂をこゝに効さんことを独 心に誓ひたりき。然るを何事ぞ 時 伴野兄等に利あらずして、初め相共に臂を把りたる、同人は 去年十二月に至りて俄然四散。 吾独り緑々の身軀を淺間山下に止むるの運に及びき。

思ひ起こす 今年正月、人は新年の屠蘇に酔ふの時 吾は与良守三郎君と共に涙にまじる三杯の酒を飲みかはして、好漢伴野兄の南行を送りき。

丈夫の心事 知る人ぞ知る。吾此一片の衷情に至りては吾知己伴野兄等よく之を解す。又敢て弁ずるの贅を須ひざるなり。只喜ぶ 人知れぬ伴野兄等が小諸学校革新に関する苦慮経営は、其の去りたる後に及んで着々現実に表はれ、加之、教育界の一方に煥焉たる正義の光は炎々消し難くして、佞人の佞を焼たる結果 今こゝに有為の新校長以下多数の敏腕家を得て積年の乱麻を、一朝に断つべき機運を迎ふるに至れることを。世は濁れり 道は衰へたり。而かも教育界中一片の正義未だ消磨し悉さずして、小諸学校における黒暗々の夜中 遂に東天の白光を迎へたるを僕は諸君と共に、喜ばざるを得ず。

語れば長し。いざや更に吾が小諸においてせし一ケ年間 懐旧の夢を操り返さんか。

咲きいでし教への庭の梅が香の清き心を誰か見るらん

と。昔の吾教へ子が歌に添へて、北の方より送り呉れし白梅の花三輪をはりつけたる去年四月の日記帳のあたり、春風まさに、懐古の園に立ち初むるの候よみもて行けば なつかしの記事も、いと多かり。

余の 初めて、小諸に来しや、依田天籟兄上京前 尚此地に在りき。思へば

ゆかしく忘れ難きその頃の生活よ。

春まだ浅き懐古の園に杖を曳て 落魄の放浪生が、樹下に低吟を嘯くとき、客魂屢々故山の花に飛び、思は常に南雲北天に馳せて、別れにし人を思ふの情懐、自ら禁じ難く、独り冥想に沈みしことも少なからざりしが、当時小諸の山と水とは日夜吾を慰めて已まざりき。

友は書を寄せて、吾を弔するに、小諸学校の扮擾を以てせしが、吾れは實際是の種の事を以て多く吾が意に介せず。懐古の樹蔭俯仰独歩、身は乾坤の一布衣として、悠悠 想を天外の雲に馳せつゝありしが、自ら少しく人生の問題につきて、解決を得しは、この時に初まりしを覚ゆ。

爛漫たる哉 懐古園の花。想ふ昨年四月の末、細々の春雨、新に晴れて、花下淡紅の滴 霜に湿ふの時 一日早辰 杖を曳て依田天籟 岡村天機の二兄とその残墨にたちしこと。又思ふ 一夜月色隴として酔月城裡 春光淡きこと夢の如くなるの夕、藤村島崎先生と園中を逍遙しつゝ、花下に温雅なる詩的趣味を聞くを得たりしこと。今や天機去て天龍河畔に蓼山將軍を資け、天籟 先んじて茗溪の学窓に入り 而して吾又慕はしの人々に別れてまさに其跡を追はんとす。熟々想へば生れて齢を積むこと既に廿有五。吾前半生は悉く是れ悔恨・不如意・蹉跌 暗澹の歴史なりけり。今より来るべき後半生は果たして如



何。老父故国の情を棄て、長く東西に飄零すること吉か凶か、吾知らず。人各々命あり 天若し吾に命ずるに信濃の山中に止まるべきを以てせば、吾は之れに従はん。天若し吾に命ずるに 乞食の生涯を送るべきを以てせば、吾は是れに従はん。天若し吾に命ずるに 関八州の平野に馳すべきを以てせば、吾は是れに従はん。天若し吾に命ずるに 太平洋の波濤に乗るべきを以てせば、吾は之れに従はん。天若し吾に命ずるに 巴里城頭に吟ずべきを以てせば、吾は又是れに従はん。まゝよ 正義の駒に鞭て、世の戦場に戦はんのみ。人各命あり。人各天職あり。是の如きのみ。

懐古の楼はうるはしけれど、吾は更に大にその園中の山桜を愛しき。爛漫の花既に去て五月の初 亭たる老松の間 峻たる峡谷の崖上 淡々の色をこらせるもの 風姿清楚宛然。是れ都門の軽薄に穢されざる山中高節の烈女に対するが如し。

吾は深く 古人の大和心を詠ずるに 吉野桜を以てせずして、特に朝日に匂ふ山桜を称説したる高見に服せざるを得ず。

山桜又既に辞するや 懐古の樹蔭溪間は そここゝ咲き乱れたる山吹と崖上に垂れかゝれるゆかりの色の藤の花とを以て 杖ひく足も、うづもれんばかりなる面白さよ。 晩春と初夏との間、吾は吾が学校の教へ子及び、折々は

音づれ呉れし親しき友と共に　この虚飾なきエデンの園に楽天の歌をうたひ  
つゝありき。思えば罪なき生活なりしよ。

樂しかりしは其晩春の修学旅行なりき。行を共にせしもの三百人。吾れ自ら  
吾少年軍に將として咄喊。小諸の停車場を出発せしときの勇ましき。あるは春  
日山頭　眸を日本海の白帆に馳て越州の山河を指しゝ、古英雄の壮図を談じ、  
あるは北海の豪濤に脚を洗はせつゝ、真砂の上に鰯の網を引き、而して直江津  
の客舎に　吾が愛児等と一夜の夢を結びたること　何れか忘れがたき思い出  
にあらざらん。

又嘗て生徒と共に上田町に赤十字總會の演習を見　帰途月を踏で小諸町に  
入りにし時　浩歌朗吟　吾党少年の意氣、如何にけなげなりしよ。

袴腰の城址・布引の奇岩・虚空蔵の山嶺・菱野の山中　数へ来れば、小諸四  
周の山河、皆是れ吾れと吾児等とを結び付くる、懐旧の媒ならぬは無し。

春去り、夏を迎ふるに及びて、懐古の緑蔭と千曲の清流とは　常に吾を慰め  
つゝ　吾をして炎熱の何物たるを知らざらしむるに余りありき。

水を泳ぎ船を操って、海国児の骨を固むるは　余が吾党の少年を率ゆる主義  
の一綱領なりき。此故に余は屢々児等を率いて水泳を千曲の河に試みしめしが、  
吾水泳部長小平英　衆を督して練習頗るつとめき。夕陽袴腰の彼方に没して

晚風恰も吾体によろしき時、中棚の鉦泉に一浴して、涼を戻橋の欄頭に取るの快味に至りては、一度之を試みざるものゝ到底知るあたわざるところ。東都の吾友、矢島・吉田・岩波等来たりて起居を共にしたるも亦この頃のことなりき。あゝなつかしの千曲の水や。殊に又御身の下流、両雄の古戦場たる善光寺平には、吾思ひ出の種をとゝめ、流は遠く越州の野をうるほして、遂に日本海の豪濤に注ぐを思ふに於てをや。

卓抜なる哉、立科の連山。御身の彼方は吾なつかしの故郷にして、吾が祖母及慈母が永眠の墳墓を置くところ。花晨月夕、眸を馳せては、其の山嶺に聯想しつゝ、うつゝに夢に、故山の吾老親と吾子ならぬ愛児とを思い浮かべたること幾度ぞ。

雄麗なる哉、浅間の岳。御身が吐き出すところの長烟に向つて、日夕吾が胸間の磊塊を寄せつゝ、自ら禁じ難き不平を慰めしこと幾何ぞ。殊に況や、昨夏同人と共に、吾が足跡を御身の焼け砂に印し、杖を御身の噴火口縁に立てゝ、造化の大工を探りたることあるに於てをや。

跌宕なる哉、追分の原。秋風一度立て天高氣清、御牧の原頭、馬まさに肥ゆるの候、吾は吾が少年軍と一日の遠足を追分に企てき。野草遠く連なりて、百花何ぞ繚乱たるや。方数里の原野、旗すゝき風になびける只中に、今や近衛

の壮士八百 其の砲車を軋らして実弾演習を試むるなり。何等の壮ぞ。 何等の快ぞ。 吾党潑々の少年 心骨豈躍らざらん。 語り出でゝは 今尚腕を扼せしむべき 吾が生徒等の話の種なり。

うるはしき哉碓氷の紅葉。 秋やうやく長けて四山霜に染まるの候、一日吾れ藤村先生に具して碓氷の新道を辿りき。 天候快晴、千里一目。 見渡せば谷のくま 山の峰 只紅黄と緑と織り交ぜたる錦繡にあらぬは無し。 脚底に清泉を掬で、団子を熊の平の茶店に命じつゝ、身は宛として雲外の仙宮に遊ぶの情味、何れの日にか忘るゝを得べき。

吾高等一、二年の男女生徒と共に、太平に於て催ふしたる、十一月一日の運動会よ。 げにいぢらしきは彼等小国民の意気なりけり。 旭旗は太郎山上に翻々として、喊声屢松林の間に起こるの時、無心の少年少女が彼等の先生と共に如何に甲斐々々しく走り、如何に健気に角力せしかよ。 やがて校庭に万歳を三呼して喝采声裏に解散せしが、彼らが活潑々地、些も憊倦の歩調を見せず、笑ましげに、満面の喜悦を以て、校門を出づるを見送りたる時、吾心中のうれしさ。

浅間下しの吹き荒れて、千曲の水音、やうやう寒き冬枯れの候に到りては、訪う人もいと稀に、自ら異郷飄零の身を憐れむの情に堪えざりしが、かくても

吾はかの土蔵の中、吾児童と共に、情は寒からぬ団欒の一炉を囲みて、古へ勇將の伝記に雪の晨を物語り、あるは角力 陣取り 球投げ 遠足 さては懐古園の大雪戦などに休業時間を娛しみき。加之、この頃は やさしき吾が教へ子が吾ために編みて送りし毛糸の足袋に、人情の寒さを防ぎつゝありき。

くり返しては 又更に忍び出づるは かの壁おちかゝれる土蔵なり。吾れの小諸学校に赴任以来、経営皆齟齬、事妨げられ、言行われず、一日として安かるべき日は無かりしが、殊に去年冬、吾が校内に正義の光、踏みじられて暗黒の現象を呈したる時、余りの馬鹿々々しさに、吾は学校を去るべき一種の決心を固めつゝ、一日吾が教室に臨みしが、見渡せば百余の児童皆是可憐の天使、只無心にして、吾を便らんとすべき顔容を見て、吾は吾が決心の、此愛児等に對して、如何に其残忍なりしを悟りつゝ、白墨を執つて塗板に向かひたる吾が双眼の、忽ち涙にくもるを覚えざりき。生徒は吾に問ふに、何の故なるかを以てしき。吾は吾亡き母を思い出でたるにまぎらしつつ 書を抛て、教員室に走り人知らぬ間を思ふ存分に泣きたることありき。かの時、吾を去らしめざりしは 慥に吾が生徒のためなりしよ。

彼らは余を慰めんとして、一ヶ年間、塵土堆積の教室を清めき。彼等は吾を慰めんとして同級会議を開きつゝ級中の整頓を、議したることありしよ。嘗て

小使の無かりし時 彼らは吾命を待たずして 如何に殊勝に働かしよ。彼らは火を起し 水を荷ひ 湯を沸し 茶を入れて、外来の先生を接待しき。我が生徒間に当選せられたる八人の艦長 即部長（級中の八縦列に命ずるに各朝日・富士等、八軍艦の名を以てしたりき）が如何に奮励して誠意誠心 余が授業を補助し、如何によく、其部下を指揮せしかよ。

去らんとするに臨みて、回顧するとき、薄暗き土蔵に向かつて、吾が胸底に湧き出づる懐旧は げに人知れぬ思ひあるなり。とがむるなかれ、世の人よ。彼処は実に、吾一年間、吾児童と 共に喜び 共に泣き 共に憂い 共に笑ひたる遺跡なるものを。

長々しき愚痴とは知れど、吾は馬場町における吾寓居を記さゞれば、小諸に於ける、吾が懐旧の文を結ぶ能はず。

追分の原頭を馳せて汽車に乗る人は、其のまさに、小諸停車場に入らんとするとき、左の窓に首を延べて 願はくは、一個のはねつるべに注目せよ。春さりくれば、井戸の辺にあやめ草、あやめづしらしく萌え出づべき西岡家北窓の一室、朝た夕べに起るべき詩的の現象は、かたるも長し。こゝ放浪の落魄生がしばしの安慰を得たるホームなりしよ。思へば過ぐる一年間 吾が寓居における老婦人が 母にも優るやさしさを以て、吾を侍し呉れたる、厚きなさけを。

人は知らじ、東京より、諏訪より、来訪せし幾多の吾友が、懐古の園を探りて、中棚の清泉に浴し、天香閣の欄頭に凭りて、浅間の長烟を望みつゝ、帰りて明窓に清談を試みしとき 友が如何に満足して、明朝小諸ステーションを出発せしかよ。

去年夏吾れ「ルーマチス」を病みて北窓に伸吟せしとき、生徒の総代数名は来りて、吾を枕頭に慰め呉れしこと。暮秋 吾童子輩と門前の柿の木によぢ昇りて、柿の実を取りたること。若しくは小春日ののどけき吾が庭前の老梅に「ハンモック」を掛けて、紅顔の可憐児を、其の上にゆすぶらしめしこと。殊に又一月以来は情懷特に隔てなき、吾友朝倉君と起居を共にして、慰められつ、慰めつ、戒められつ、戒めつ、嚴冬机を囲みてかの中学入学の志願生等を教へたること。吾れ忘れめや、吾れ忘れめや。

生徒と遠足を約せしとき、黎明彼等の来たりて、門前を叩きし時、吾脚の如何に軽く、追分の原頭に向て、跳びしかよ。一日降雪四尺、門前人絶えて、風雪霏々、而かも此日早晨 此雪を分けて、吾数名の児童は、吾を迎へに来たりき。吾は自ら彼等の衣を払ふて其手に息吹き、彼等をして、相共に、団欒の炬燵に物語らしめき。

更に思ひ出づるは小諸ステーションなり。あゝステーション、ステーション

ン。御身の「プラットホーム」に、幾度吾は吾が知己を迎へ、又之を送りしかよ。去春一夜、吾れ始めて、小諸停車場に入りし時、終列車の燈下に、其さびしさを、かこちたりし小諸ステーションよ。今將た、去り難きよしみを、吾心に思い出でしむるは何のゑにしぞ。

かの富士見坂の踏切りに弁当箱をつるしながら、折々は南天に玲瓏の芙蓉を望みつゝ、幾度吾は、浅からぬ瞑想に耽りしよ。夜は深けて寒月只、数条のレールを照しつゝ、暗中色燈の晃たる、忘れ難き、踏み切りよ。時雨ぞそぼつ秋のくれ、かの木欄にもたれつゝ、無心に汽車の黒烟を見送るは、誰が子ぞ。

あゝ此汽車よ。御身はまさに、吾をのせて、此なつかしの小諸を去らざるべからざるか。

春風今や浅岳のまともをかすめて、懐古の園裏、花まさに笑はんとするの候吾は遂に、此愛着の土に別れざるを得ざるなり。都の花は既に散りぬ。都の花に後れにしこと、露惜しからねど、天何ぞ吾をして信濃の花にそむかしむるや。人各命あり。

吾れの小諸に対する罪に至りては、誠に多し。而かも小諸の山河と、小諸の知己と、而して彼の愛々の児童と、過去一ケ年間、吾を住ましめ、吾を養ひ呉れたる、厚き交誼と、うるわしきなさけとに至りては、感佩多々。吾只魯鈍に



して、其の知遇にそむかんことを、畏るゝのみ。俯仰回顧　信濃教育会における吾三ヶ年間の歴史を思へば、恍として只夢の如し。小諸を去らんとするに臨み、感懐まことに浅からず。詠む人只痴人の痴語として、一笑に附すること無くんば幸甚。

さらば浅間の山。さらば千曲の水。さらば小諸の知己。さらば吾小諸学校の諸君。さらば信濃に於ける吾友及吾教へ子の総て。

さらばよ、故国の山河。健在なれ。いざ別れん哉。

四月十二日小諸町の寓居に此の文を草して、懐にしつゝ十五日朝一声の汽笛と共に停車場裡　吾は小諸の人々及び生徒等に別れ、無限の感を汽車の黒烟に残して、伴野・笹岡・仁科・春日・平沢の諸君と共に、上京の途に就きしが、今や身は既に茗溪の橋畔にあり。学窓独り浅間山と諏訪湖との写真を掲げて、夢魂屢かの児等と手を故国の山河に携ふ。今日しも友と杖を不忍之池畔に曳ひて新緑の上野を漫歩せしが　帰来吾机上に得たる、朝倉・小林二君と小諸の児等よりの書中封入するところ、吾が旧居の梅花及び酔月城裡の花三輪、児等の一人が飾りなき文に曰く、このさくらの花まことにすこしには御座候が　先生に奉らんとて、今朝学校へ参りがけに

わざわざたをし折りて、先生の東京にて、吾が懐古園を、お思い出しまでに、さしあげ候間 受取り下されたく候、と。あゝ 友の情 何等のやさしさぞ。児等の心ばせ、何等のしほらしさぞ。殊に又この日、吾友宮沢国粹兄及北沢種一兄の客書を得たり。国粹兄覇氣 年を経て、愈々雄健 人と土地とに感激する深き情懷は旧によりて慕ふべく。今や征衣を長野の春風に翻して、而かも夙夜に家国生民を慨するの気魂書中に溢れ、まことに惰夫をして起たしむるものあり。北沢君は吾と同郷、心情高潔 氣骨稜々として、古人の風あり。まことに、教育会中 得易からざるの好漢。今や師範の新卒として年少氣鋭磊々の雄心を持して、北安の大町にあり。此日寄せしところの君が書中、吾友松沢兄等と木崎湖畔に斯道を画策するの福音を聞くを得たり。あはれ うれしき哉 故人の情。今や吾れ車馬雑踏の巷に立ちて、街頭に紅塵を呼吸しつゝ、晨夕都門の輕薄に、耳目を犯さるゝの際 涼風一陣吾脳裡の塵垢を洗除して、涓々の清泉を掬するの想あらしむるものは、実に郷国の人の情けなりけり。あゝ信濃の江山。あゝ信濃の人。この人を伴としてこの江山の裡に、吾が志を養ひつゝ、悠悠育英の至樂を味ふこと 亦可ならずや。自ら訪ふて曰く、汝それ何を苦んでか、汝が信濃の老親を残し 汝が信濃の樂園を棄て 汝が信濃の可憐児を後

にし、汝が信濃の江山にそむき、出でゝ 營々の巷に奔馳するの陋を演ずるぞ。遂に自ら答ふること能はざるなり。

此の夜 学窓に 弧座沈思 転た無限の感慨に耽る。窓を排して眺むれば 半輪の淡月 おぼろにニコライの尖塔にかゝりて、お茶の水のおそざくら、堤上に片々たり。嗚呼 落花 有情 流水 意なきにあらず。人間 豈に涙無からんや。

四月二十六日夜高師灯下に擱筆。

明治三十四年五月発行「学友」第十三号に発表されたものより印字す。旧字体は新字体に、変体仮名は普通のひらがなに直し、句読点や間隔は随意に付した。発見された草稿と多少の相違がある。

小山 登